

零 戦 II

零戦のブームは何回かある。第一次は、海軍内部のごく少数に限られたもので、つまり、零戦の初陣である。ただ戦闘機能だけを比較すれば、97式艦上戦闘機（この設計者も堀越二郎）のほうが上だった。しかし、最高速度や飛行距離には雲泥の差があり、たとえば、このころの戦闘機の飛行距離はせいぜい数百キロであり、たとえばドイツの誇るメッサーシュミットは、ロンドンを空爆（バトル・オブ・ブリテン）して、帰りのわずか40kmのドーバー海峡を越えることができなかった。歴史に「もし」はないけれど、零戦がドイツにあったなら、イギリスは廃墟になっていただろう。零戦は3000km以上の航続距離だった。これだけでも世界中が驚嘆するものだった。

第二次ブームは、坂井三郎の「坂井三郎空戦記録」ついで「大空のサムライ」である。と同時に堀越二郎の「零戦」、奥宮正武との共著「零戦」と相俟って世界中を巻き込む一大ブームになった。

現在は、第何次かの零戦ブームである。百田尚樹の「永遠のゼロ」は、特に若い人々に零戦を知らしめた。さらに、「史上最高の戦闘機である零戦」に惚れ込んで世界中から零戦の破片をかき集め、再生し、飛行できるようにしている人がいる。2016年現在、7機の零戦が飛行可能である。自らの命を零戦に託し、戦後も生き残った勇士たちの話を聞いただけで、自分も大空を飛んでいると錯覚している零戦の会の会長とか、ヒマラヤの掃除をしようとかいうのがテレビで、「飛んでいる零戦」に感動し、美しい、などと手放しで褒める。・・・「日本に零戦を」というのはいいが、わずか2~3億円の金を用意できない。その程度の人物がその程度の感覚で零戦のことをあれこれ語って欲しくない。無能なリーダーの下では、その程度のこともできない。やすい買い物ではないか。

零戦パイロットで、戦後も生き残った人はともかく、戦死した人々のことも思い出してほしい。「ラバウルの魔王」と呼ばれた西澤廣義、宮野善次郎、武藤金義、杉田庄一、鴛淵孝、笹井醇一（みずから東洋のリヒトホーヘンたらんとしていた）、その他、数千人の尊い犠牲者のお蔭でわれわれは現在生かされている。（柳田邦男「零戦燃ゆ」）

生き残ったパイロットは、岩本徹三（202機撃墜、不遇のうちに亡くなられたそうだが）、角田和男（坂井三郎に言わせると、この人がもっとも働いた、という）、

進藤三郎（零戦デビュー時の隊長、人格力量ともに秀でている）、鈴木實（スポットファイアーと死闘）、滋賀淑雄（真珠湾で真っ先に攻撃した）、小町定、黒澤丈夫（日航ジャンボが墜落した時の上野村の村長）、羽切松雄、原田要、生田乃木次、本田稔、その他、数えきれないが。彼らは、当初はインタビューに応じていたのだが、まったく意図しない使い方をされたため、以後沈黙を保ってしまった。そしてそれぞれ一冊の著書を遺しているだけだ。

本田稔氏のご健在で、ラバウルも行ったし、戦争末期には B29 を相手に活躍された。長崎への原爆投下は、命令があったら阻止できたのに・・・と今も悔やんでおられる。

いろいろな悪意に満ちた表現があっても、零戦ブームは、やはり、坂井三郎を除いては語れない。

以下、坂井三郎さんのほとんど遺言のような語りがある。それを引用させてもらう。実際に大空を飛んで、敵と戦い、特攻も命じられ、隻眼で 15 機のグラマン F6F に攻撃されたが生きて帰ってきた人の話には、軽薄な戦後生まれの連中では及びもつかない凄みがある。

ラバウルには韓国人（朝鮮人のことか？）3000 人、台湾人と高砂族が合わせて 2000 人、計 5000 人の私設部隊（軍属のことも含むのだろうか？）がありました。・・・あの人たちは、天皇の軍隊、皇軍としてラバウルまで行き、大変な働きをしたんです。だから当然退職金代わりに恩給を支払うべきです。負けて国籍が変わったからって払わないというのは日本の道義に反していますよ。

謝罪だ、保証だって、払ってはならないところに言いなりに払って、（たとえば中国、東チモール、イタリアやスイスまで臆面もなく、賠償金をせしめる。）皇軍として命がけで働いた人たちに何もしない。これはどう考えてもおかしい。（実際、ニューギニアでも多くの軍属が活躍し、たとえば高砂族の食糧調達能力はすばらしいものがあり、自分は餓死しても日本兵のために働いた人もいる。軍属になりたい、と朝鮮でも台湾でも何百倍もの応募があったという。）

私（坂井）は、ラバウルで、搭乗員を集めて、「絶対に自爆や体当たりはするな」と言いました。俺たちは死にに來たんじゃないぞ、勝ちに來んだ、と。ところが敗戦の前年に硫黄島で最初の特攻命令がでた。（坂井さんは、この命令をうけている。）その 3 か月後フィリピンで正式に「神風特攻隊」が始まった。しかし、特攻なんてそうそう当たるものじゃないんです。そもそも特攻機一機当たったくら

いじゃあああいう大きな航空母艦は沈みません。じゃあどうするか。沈めなくてもいいから、使い物にならなくすればいい。つまり甲板の中心に大穴をあければいいんです。……戦闘能力を奪えばいい。だから零戦は、250 kg爆弾を積んで突っ込んでいったけれど、50 kg爆弾でよかった。250 kgでは速力が200 km/hくらいに落ちるから（註；通常は500 km/h）目標到達前にはほとんど撃ち落されてしまったんです。50 kg爆弾で高速で突っ込んでいけば、もっと確率が上がる。そうすれば、勝てないまでも負けない戦争になった可能性はある。

最後まで目をつぶるな、目をつぶったら命中しない、目的を果たせず、無駄死にだ。……そう言われたって当たる寸前にはどうしても目をつぶってしまうんです。だから外れる。……むごい話ですよ。

そういうむごいことを言ったのが大西瀧治郎と、それに付いていた源田実。2人とも山本五十六のイエスマンですよ。調子のいいオッチョコチョイです。こいつらが決めるものだから、まったく実戦にそぐわない。

ミッドウェイ海戦で、米軍がカミカゼを行った。源田実の実戦を知らない（というのは有名な話である。）から、まんまとひっかかって「空白の5分間」ならぬ「間抜けな5分間」（実際に魚雷と爆弾の入れ替えには1時間近くかかる。山口多聞少将は、爆弾のままで攻撃することを具申ししていたが、南雲と源田との2人のためにぶちこわしになった。源田など、山本五十六に、「決して魚雷を外してはいけない」とまで言われていたのにもかかわらず、勝手に変更してしまった。

（山本五十六凡将論というのは、古くからある。真珠湾の淵田美津雄中佐など、直接言えなかったけれども、凡将ですか？という質問にそっぽを向いて同意した。念のため坂井は山本を嫌っていた。ある攻撃機が墜落して搭乗員が敵の捕虜になってしまった。すると、この搭乗員たちを危険な任務にばかりかかわらせ、いかにも死ねとばかりに酷使した。坂井らは、この搭乗員の命を守るのに意地になっていたようである。しかし、山本は、結局は自爆を命令したようなものである。このときの坂井の怒りは尋常ではなかった。そうでなくとも、ベテランの搭乗員が次々に戦死していたときである。捕虜になったらなぜ死なないか！というわけであるが、のちに福留中将らが敵に暗号表までうばわれているのに、お咎めなしだった。同じ兵学校出身だからと言われている。それ以前に、戦闘機無用論を源田が提唱し、山本が認可した。この3年余の空白が実際には大きかった。）

先日、森元首相が、「日本は天皇を中心とした神の国」と失言した。バカを言っちゃいけない。

だいたい、ぼくらは「皇軍」という天皇の軍隊で戦って、負けて武装解除されて、尾羽打ち枯らして帰ってきました。そのとき、「軍隊が勝手に戦争を始めて負けて帰ってきやがった」なんて、ずいぶん罵られた。それは大きな間違いです。軍隊は、あくまで上からの命令で出動し、戦闘を行うんです。一兵卒、カッター一艘に至るまで勝手に動くことはありません。

日本は武士がいなくなりました。だから明治天皇が将来を案じて軍人勅諭を下され、軍隊は「世論に惑わず、政治に拘わらず」と諭された。……それが「世論を動かし、政治まで動かす」という一番やってはならんことをやった。「上官の命を承ること実は朕が命を承る義なり」ですから、上からの命令があって初めて飛行機も動かせる、給油もできる。だから、我々が戦闘を始めたわけじゃない。開戦の詔によって戦争が始まったんです。

その命令によって、我々はいちばん歩の悪い、いつ死んでもおかしくない戦闘を引き受けた。そして国民も、それをバックアップするという役割を担ったんです。……にもかかわらず、負けたらすべて軍人のせい。国民は知らない。……冗談じゃない。

勲章をくれとは言いません、負けたんですから。しかし、我々は天皇の命令で南半球まで行って帰って来たんです。いまは、漫才師や落語家ですら勲何等とかって叙勲を受けます。それなのに我々に一言もないのはどういうわけでしょう。開戦の詔勅を下した天皇から「ご苦労」の一言があってしかるべきではないか。それが日本の道ではありませんか。私は、たとえ首を切られても、これだけは言い続けます。死んだ仲間のためにも。

終戦後、外国人記者クラブが、戦時中の日本の外交官や軍人を呼んで話を聞こうというときになったとき、最初に呼ばれたのが私でした。その席で、ニューヨークタイムズの記者が「太平洋戦争をどう思うか」と聞いたので、「そんな大きなテーマを短い時間では語れないが、しかし、どうしてもというのなら、私はこう思う」と前置きして、答えました。

石油もない、資源もない、地球儀を見ればわかるが、こんな小さなトンガラシみたいな国が世界を相手にして勝てるわけがない。無謀な戦争を始めて惨敗した。国破れて山河だけが残った。しかし、負けはしたが、戦争の目的は十分に果たした、と。

ニューヨークタイムズの記者が「どういうことか」と聞くので国際連合を見て

みろ、と答えました。第二次大戦までの国際連盟の加盟国は、日本が脱退した頃は、50カ国ほどだったのが、いまの国際連合は170カ国くらいあるじゃないか。つまり独立国がおよそ120カ国も増えたことになる。その中身を見ろ、と。その大多数が非白人の国だ。日本が戦争を始めたおかげで、それだけの有色人種の国が独立した。我々を侵略者呼ばわりするけれど、ではイギリス、フランス、オランダは何をしたのか。……(うろ覚えなのだが、この時点で石原慎太郎だけが拍手をした、という)……白人たちがどれだけ有色人種を殺し、搾取・掠奪していたか。それを排除するには、現地に行くしかないじゃないか。我々が戦ったためにアジアは白人から解放された。そう考えなければ死んだ戦友たちはどうなる。貴様らの死は無駄だったなんて言えるか。私がテーブルをたたいてそう言ったら、シーンとしてしまいました。

私が日本人として非常におかしいと思うのは、広島原爆慰霊碑です。あそこに何と刻まれているか。「安らかに眠ってください。過ちは繰り返しませぬから」これで眠れますか、20何万の人が。こういう間違った戦争を始めたのは誰なんだ、と。誰が原爆を落としたんだ、と。その者は罰したぞと、そう言うことができ初めて、以って瞑すべしということになるんじゃないでしょうか。

誰が「過ち」を犯したのか、だれが「繰り返さない」のか、それがあの碑文ではわからない。責任の所在をこんなふうにあいまいにするのが日本人です。文章を書いても、標語を作っても、日本人は名前を出したがない。……責任をとりたくないから。(坂井さんは、『匿名』を嫌っている。)

仮にいまなお海軍が存続していたとしても、兵学校を出ていない私を海軍が正當に遇することは決してなかったと思います。その点、アメリカは違います。「どうやってあなたは戦闘を勝ち抜いてきたのか。なぜアメリカの戦闘機をあれだけ撃ち落しておいて、自分は致命傷を受けず、いまなお元気なのか」と真剣に聞いてくる。米軍の戦法はどうだったか？それに対してあなたはどのような戦法をとったのか。日米の飛行機の性能の違いはどうだったか？どう考えてどう行動したのか、ミスをしたことはなかったか、それをどうやって克服したか……。アメリカの軍人は熱心に、それこそありとあらゆる質問をしてくれます。そして、かつて敵として戦った私に対しても功績があれば素直に認め、敬意を払ってくれる。日本とはそこが違いますね。

坂井三郎さんの話の根底には、日本の海軍(陸軍でも基本的には同じだろうが)

では、海軍兵学校を卒業しているだけで、実戦の経験もない若い尉官クラスの未熟な兵を司令官に抜擢する。そのため、まったく見当違いの戦法をとり、結果的に多くの有能な搭乗員を死なせている。いかに優秀であっても、下士官以下の兵には指揮をとらせない。坂井さんが大事にした笹井醇一中尉などは、きわめて特殊な士官であって、飛行機の操縦についても謙虚に兵の教えを乞う。そういう士官がほとんどいなかったことが、ミッドウェイなどにおける敗北につながってしまった可能性も否定できない。戦闘機の操縦や戦闘（ドッグファイト）は、プライドだけではできないのである。西澤廣義など、名のあるパイロットは、兵学校を出ていなかった。だから、ある意味大事にされなかったのである。

もうひとつ、ボクの嫌いなことは、海軍精神注入棒で兵を殴ったり、陸軍でもそうだが、鉄拳制裁が日常的におこなわれていたことである。だから、台湾のために奔走した根本博中将やイギリス兵を救出した工藤俊作少佐のように鉄拳制裁を厳禁した指揮官が特筆されること自体、各地の軍隊で日常的におこなわれてきたことを示している。・・・無能な指揮官に多いように考えるのはボクだけではないだろう。

2016. 07. 22.

下士官以下の冷遇についても語られているのだが、ここで書いてしまおう。半藤が、「山本五十六の無念」を著している。「無念」は、無能な将校たちのために死んでいった兵ではないか。たとえば、ミッドウェイ。連合艦隊司令長官は、司令官を選ぶことができる。それが、なぜ南雲と源田なのだ。源田など、「鎧袖一触ですよ」などと、完全に初戦の戦果に有頂天になっている。山本は一応注意をしているが、更迭のほうがよかった。なぜなら、ニミッツには、山本の作戦の傾向がわかってしまっていたからではないか。ニミッツなどハンモックナンバーでは 29 番目の少将だったのを抜擢されている。博奕の好きな山本と黒島のコンビの成功は、一応の警戒をしていたが、まさか日本軍がいきなり攻撃してくるとは思わなかったからではないか。（ルーズベルトは、知っていたが、ハワイの司令官には伝えなかった。）成功例はこれだけで、秋山真之に匹敵するのでは・・・などと言われていたらしいが、海軍部内で秋山真之に相当する参謀は樋端久利雄ということになっていたし、司令官も山口多聞少将がいる。年功序列で国が亡ぶかどうかの時点で決められたらたまらない。小澤中将もいるし。秋山真之は 37 歳だっ

た、樋端は40歳である。樋端なら、ミッドウェイの戦況は変わっていただろうといわれている。悔やんでも悔やみきれない山本の失敗である。

半藤は「歴史の語り部」とか言って、自己満足に陥っている。何のことはない。自分の意見がないから、事実だけを羅列して年表がわりにしかならない。

語り部というのは、原爆被害者や沖縄戦などの体験者のみが許される呼称だと思う。子供が小学生の時、ひめゆり部隊の生き残りの60歳前後の女性の語ることは、子供たちにわかっただろうか。

語り部の彼女らがいなくなってしまうたら、次の世代が語り継ぐとはいうが、体験者である彼女らでさえ、年月とともに記憶が薄れていくだろう。実際に経験したことがない人にどこまで語り伝えられるのだろう。……昔の講釈師のように山場だけを強調し、それ以外のことを伝えられなくなってしまうのではないか。

曾野綾子さんは、このところ、小説もそうだが、随筆をこれでもか、と書いておられる。ここ数年で20冊以上、著書があるのではないか。その曾野綾子さんが自らの経験から、「恐怖にしても悪にしても、それを描写するときには、個性と意外性があるものだ。自分の命を奪いに来た敵の爆撃機の編隊を見て、アツきれいなあと思ったり、消火のための水をバケツで運びながら、自分の好きな歌を歌うのをやめられなくなったりする。そういう部分が、受け継いだ語り部には欠落するから、信用できない。こと戦争に関する限り、少しでも明るかった、おもしろかった、自分の心の成長にプラスになった、と言え、それはまず不道德なことと非難され、次いで嘘だと言われかねないからである。

だから、体験してきた人の話を聞いただけで、自分も経験したように錯覚しかねないから、信用できなくなる、」とも語っておられる。

すでに述べたように、体験してきた人の話を聞いて、自分も経験したように勘違いするのが多いから、気をつけなければならない。

2016.07.25.